

脳波 定期検査が重要

てんかん

病院の実力

*広島編 167

今回の病院の実力は、てんかんを取り上げる。脳の神経細胞が興奮し、発作を繰り返す病気で、脳神経内科や小児科、脳神経外科、精神科などが診療を担う。症状は、脳のどの部位に原因があるかなどで異なる。意識を失ったり、全身がけいれんしたりするケースもあれば、吐き気や不安な気持ちを伴うケースもある。

発作そのものが命に関わることはまれだが、溺水や転落などの事故につながるおそれがある。重い発作を繰り返すと、脳にダメージを残すこともある。適切な診断と治療が重要だ。治療の基本は服薬だ。発作のタイプや年齢に合わせて種類や量を決める。患者の3割は薬が効きにくく、手術も選択肢となる。

てんかんの専門医がいる

病院の実力「てんかん」
医療機関別2020年治療実績（読売新聞調べ）

医療機関名	患者数 (人)	うち15歳以下の患者数 (人)	紹介した患者数 (人)	紹介された患者数 (人)	22年1月現在 専門医非常勤を含む (人)
鳥取県					
鳥取大	296	60	10	20	4
島根県					
島根大	363	128	8	45	1
岡山県					
倉敷中央	2685	397	5	39	6
岡山大	2400	700	—	140	5
国・岡山医療セ	1600	1135	144	70	2
倉敷成人病セ	523	300	0	0	1
岡山脳神経内科ク	456	9	1	20	1
広島県					
広島大	1768	964	326	153	7
福山市民	707	341	56	130	3
なむら神経内科・メンタルク	376	0	5	10	1
はやかわ小児ク	211	144	2	14	1
ちやたに脳神経すいみんク	9	1	2	4	1
山口県					
山口大	2574	331	361	66	3

「国・」は国立病院機構、「セ」はセンター、「ク」はクリニック、「—」は無回答または不明。

医療機関は、全国で約400施設に限られる。診療をスムーズに進めるには、医療機関同士の連携が力ギになる。専門施設が診断や詳しい検査、手術を行い、病状が落ち着いたら、身近な

発作録画で手術判断

広島大病院てんかんセンター長

飯田幸治・診療教授に聞く



「検査で原因を見極めることが大切」と話す飯田センター長（広島大病院で）

全国の調査結果は20日の「安心の設計面」に掲載しました。

かかりつけ医に任せる仕組みが必要だ。一覧表には、患者数や専門医の数のほか、連携の状況を示す目安として、他院に「紹介した患者数」「紹介された患者数」も載せた。てんかんの発作が数年間起こらない場合、薬が不要になることもある。ただ、再発のおそれもある。定期的な受診し、脳波などの検査を受けることが大切だ。

広島大病院てんかんセンター（広島市南区）の飯田幸治センター長（診療教授）に、治療法や周囲の人々が理解しておくべきことを聞いた。（聞き手・森谷達也）

「てんかんの症状は、体がグッと固まったり、手足をビクビクさせたりするほか、意識を失って倒れる、ぼーっとして呼びかけに反応しないなど、症状は様々です。高齢者の場合、認知症と間違えられるケースもあります。」

治療法は、発作がてんかんか、別の

原因なのかを見極めるのが難しい症例も多いのですが、スマートフォンで撮影した発作の動画を専門医が見れば、原因が判断できます。治療は服薬が基本で、2種類以上の薬を1年以上使っても発作が止まらない場合、「難治性てんかん」として手術も選択肢になります。

1週間程度入院し、脳波を測定しながら発作を録画する「長時間ビデオ脳波モニタリング」を行うと、手術の要否や切除するべき部位が分かります。当院では、脳の電気活動で生じる微細な磁場を捉える「脳磁図検査」により、モニタリングでは特定できない発作の原因も調べることが出来ます。

——職場や学校で求められることは、

多くの患者は適切に服薬すれば、発作を抑えながら日常生活に大きな支障なく暮らせます。発作の不安を抱えて仕事するより、あらかじめ会社に病気について伝えておくのも良いかもしれません。学校では、教師らが発作の誘因や症状を把握し、避けるべき運動や発作の対処法を保護者と話し合っておくことが大切です。

読売新聞の許諾を得ています

掲載日付 2022年4月24日